



【住 所】奈良県橿原市四条町840番地 【病院長】榊 壽右 先生
 【中央内視鏡・超音波部 部長】福井 博 先生 【病 床 数】930床
 【スタッフ】内視鏡医師 2名、超音波医師 2名、看護師 6名(うち内視鏡技師 3名)、
 診療放射線技師(内視鏡技師の資格も保有) 1名、臨床検査技師 3名、
 事務 3名(うち専任は 2名)、専任内視鏡洗浄員 1名
 【検査総数】(平成19年度) 5,367件(うち、上部消化管 4,701件、下部消化管 553件、
 ERCP 109件、腹腔鏡検査 4件)
 【治療内視鏡総数】(平成19年度) 705件
 【スコープ本数】25本(うち、上部用 12本、下部用 4本、十二指腸用 5本、経鼻用 3本、
 小腸内視鏡1本)
 【その他設備】高周波出力装置・止血装置 7台、腹腔鏡 5本、内視鏡洗浄器 5台 など

安全性と機能性に配慮した設備と医師・スタッフの高い専門性が 最先端の診断と治療を実現

30年後も使える検査室を目指して 安全性と機能性に配慮した最先端の内視鏡室が実現

奈良県立医科大学附属病院の中央内視鏡部は、平成15年末に新棟に移転し、平成16年に超音波診断室と統合して現在の中央内視鏡・超音波部となりました。

同院では平成15年の臨床棟の新設に伴い、検査室の設備やレイアウトを大幅に変更・改善しています(図1参照)。検査室は全部で8室配置されていますが、そのうちの3室がX線透視室、1室がマルチモニタリングシステムを備えた全麻下での内視鏡治療が可能なクリーンルームとなっています。また、患者様と医療側の導線が交差しないよう、各検査室は敷地内の辺縁に放射線状に配置されています。中央内視鏡・超音波部の副部長で内視鏡業務を担当する藤井久男先生は、「内視鏡検査や治療はどんどん高度化しているため、安全管理を徹底して日々の診療を行うことが非常に重要です。そのため当院では、あらゆる事態に対処できるよう、ICUや手術室と同様、スタッフが機能的に動けるようなレイアウトにし、将来に備えて、一般病院の手術室と同等の設備を検査室内に設けました。これにより、より積極的な内視鏡検査や治療を患者様に提供できると考えます」とお話になりました。現在ではダブルバルーン小腸内視鏡や経鼻内視鏡、超音波内視鏡なども導入し、また品質と感染リスクを考慮して内視鏡処置具

をディスプレイ化するなど、安全で質の高い最先端医療を地域に提供しています。

中央内視鏡・超音波部 副部長
藤井 久男 先生

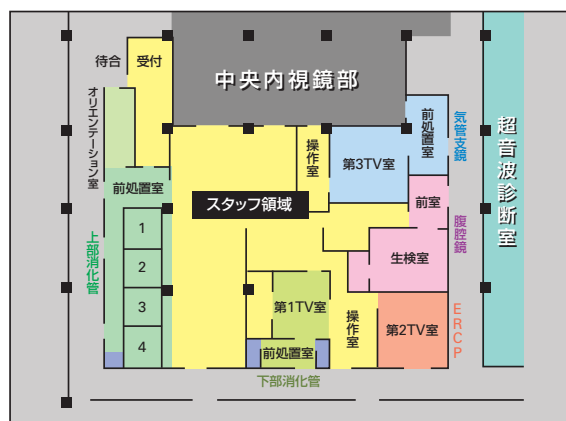
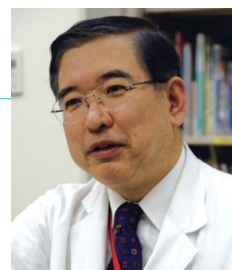


図1：検査室レイアウト

2つの部門が専門知識と先端技術を持ち寄り 消化器疾患の早期発見と確実な診断を実践



中央内視鏡・超音波部 副部長
平井 都始子 先生

中央内視鏡・超音波部では、専門を異にする2つの部門が統合したことで様々なメリットが生まれています。超音波検査部門の主査を取る副部長の平井都始子先生は、「小肝癌や小膵癌、早期胆嚢癌などの大半は超音波検査によって発見されます。これらの消化器系疾患の診断と治療を内視鏡と超音波それぞれの専門医が連携して行うことで、疾患の早期発見と正確な診断、効果的な治療戦略の策定に役立っています。特に超音波内視鏡を施行する場合は、超音波専門医の立合いのもとで検査を実施していただいています」とご説明されました。平井先生は、今年5月に兵庫県神戸市で開催された日本超音波医学会第81回学術集会において、公開市民講座『超音波とあそぼう』のモデレーターを務められるなど、子供から大人まで、一般の人々が超音波検査に対する理解を深め、検査をより身近に感じてもらえるような啓蒙活動にも尽力されています。

中央内視鏡・超音波部では、専門を異にする2つの部門が統合したことで様々なメリットが生まれています。超音波検査部門の主査を取る副部長の平井都始子先生は、「小肝癌や小膵癌、早期胆嚢癌などの大半は超音波検査によって発見されます。これらの消化器系疾患の診断と治療を内視鏡と超音波それぞれの専門医が連携して行うことで、疾患の早期発見と正確な診断、効果的な治療戦略の策定に役立っています。特に超音波内視鏡を施行する場合は、超音波専門医の立合いのもとで検査を実施していただいています」とご説明されました。平井先生は、今年5月に兵庫県神戸市で開催された日本超音波医学会第81回学術集会において、公開市民講座『超音波とあそぼう』のモデレーターを務められるなど、子供から大人まで、一般の人々が超音波検査に対する理解を深め、検査をより身近に感じてもらえるような啓蒙活動にも尽力されています。

医師とスタッフの良好なコミュニケーションが 専門化・高度化する内視鏡診療を支える

近年飛躍的に専門化・高度化を続ける内視鏡診療において、医師とスタッフがお互いに連携し、チームワークを強化して診療にあたるのが非常に重要になっています。同部でも、初期研修を受ける研修医には、まず始めにスコープ洗浄と関連機器のセッティングを体験してもらい、洗浄員や看護師、技師の役割を理解し、チームワークの重要性を肌で感じてもらうようにしているそうです。またスタッフの専門性も高く、内視鏡技師は3名、また内視鏡技師の資格を持つ放射線技師も1名在籍しています。放射線技師が内視鏡技師の資格を有することで、透視を使った検査や治療において手技の流れを理解して機器の操作を行えるということはもちろん、透視室で介助を行う内視鏡技師の補佐を任せることもでき、効率よく手技を行えるそうです。師長の中川やよいさんは、「術前にはカンファレンスを実施してもらい、患者様の情報を把握するとともに十分な準備体制を整えるのに役立っています。高齢や心疾患などで麻酔を使用できない患者様に対しては、ハッカ油を用いて蠕動を抑制するなど、患者様の苦痛を軽減し、検査や治療の不安をなるべく取り除くよう配慮しています。」と、患者情報の共有がスムーズな検査や患者ケアの向上に貢献することをご説明いただきました。さらに、「ベテランのスタッフの中にリーダーを置き、指示系統を明確にして処置にあたっています。また、リーダーは学会や勉強会への参加を促し、スタッフ全員のモチベーションを高める役割も担っています」と、医師との連携だけでなく、スタッフ間のコミュニケーション強化にも日々尽力されていることをお話いただきました。

最後に藤井先生から、「昨今では、ESDなどの高度な治療手技に代表されるように、治療目的の内視鏡手技の増加により内科と外科の境目がなくなってきています。これからは診療科の垣根をなくし、医師、スタッフともに連携を強化して先進的な内視鏡治療に取り組んでいく必要があると実感しています。そのためにも、将来的には部門をセンター化するのが理想で、情報共有やリスクマネジメントのインシアチブを取りながら、安全で質の高い内視鏡検査や治療を地域に提供していきたいと考えます」と、今後の展望についても語っていただきました。



中央内視鏡・超音波部のみなさん（前列左から2番目が中川やよい師長）